

平成22年度組織的な大学院教育改革推進プログラム
「女性の高度な職業能力を開発する実践的教育」
「キャリア形成のための院生自主企画」実施報告

I. 自主企画の内容

(1) 企画の名称

「海外における文化遺産保存の意義とその成果」

(2) 開催日時・会場

2010年6月9日(水) 14:00～15:00 S棟215教室

(3) 講演者

上野 邦一 (奈良女子大学古代学術センター特任教授)

増井 正哉 (奈良女子大学生生活環境学部教授)

Maqsood Ahmed (パキスタン考古博物館総局 Senior Architect)

Tahir Saeed (パキスタン考古博物館総局 Assitant Director)

(4) 企画者

濱田 晃子 (人間文化研究科博士前期課程国際社会文化学専攻古代文化地域学コース)

今井 和代 (人間文化研究科博士前期課程国際社会文化学専攻古代文化地域学コース)

後藤 愛弓 (人間文化研究科博士前期課程国際社会文化学専攻古代文化地域学コース)

村瀬 満早子 (人間文化研究科博士前期課程国際社会文化学専攻古代文化地域学コース)

(5) 支援教員

出田 和久 (奈良女子大学文学部教授)

(6) 参加人数

28名 (内訳: [学内] 教職員6名、大学院生12名、学部学生・研究生4名、不明2名、
[学外] 他大学学生2名、企業・団体職員2名)

(7) 自主企画概要

本企画では、そのような海外、特にアジア地域における文化遺産の保存や修復、調査の現状とその成果を学び、それらの地域で活躍する研究者との交流を通して、文化遺産保存とい

う専門分野におけるキャリアの形成につなげていくことを目的とした。

文化遺産は今日に伝えられてきた人類の貴重な財産であり、歴史や文化、伝統を理解するにあたり、非常に重要なものである。国や地域に関係なく、今後社会が発展していくに当たっても失われてはならないものである。日本は、アジアの中では比較的、文化遺産の保存制度も整備されており、保存修復技術も国際的に見て高い。そのため、海外、特にアジア地域での文化遺産の保存に多数の研究者が貢献している。当然、現地の技術者も文化遺産の保存に携わっている。本企画では、実際の海外における文化遺産はどのように行われており、その現状はどうなっているのか、また現地の人々にとっての文化遺産保存の意義及び重要性、その難しさを実際に海外の文化遺産の保存に携わってきた方々に、その経験を語っていただき、文化遺産保存についての知識と見解を得ることに焦点をあてた。

本企画では、アンコール遺跡群やガンダーラ遺跡などの調査および修復事業に携わってこられた上野邦一先生、増井正哉先生の他、パキスタンの文化遺産を保存・修復しておられるパキスタン考古博物館総局の Ahmed 氏、Saeed 氏の両氏をお招きし、海外における文化遺産保存の現状と課題についてご講演いただいた。講演により、特に、研究者が学術的な調査に基づいた修復を目指すのに対し、企業や政府は観光を目的とした復元を求めるといふ、遺跡保存に対する認識の違いが問題となっているという現状を知り、文化遺産保存の難しさを改めて考えさせられた。また、その後の討論会においては、遺跡を継続して保存するためには研究者や修復技術者の育成のみならず、地域住民に対する遺跡の価値に関する普及活動が必要であるとの議論に達した。

本企画を通して、文化遺産保存のみならず海外での協力・援助活動の現状と目標についての知識と見解を得られたことは、今後国際社会へと踏み出す可能性のある我々にとって大変有意義な経験となった。



II. 実施報告

1. 講演者による講演

1.1 CULTURAL HERITAGE OF PAKISTAN (パキスタンにおける文化遺産調査について)

Maqsood Ahmed (パキスタン考古博物館総局 Senior Architect)

Tahir Saeed (パキスタン考古博物館総局 Assistant Director)

研修のため来日していたパキスタン考古博物館総局(以下パキスタン考古局)所属の Maqsood Ahmed、Tahir Saeed 両氏をお招きし、パキスタンにおける文化遺産の現状と保存に関して、お話していただいた。Saeed 氏は、主にパキスタンの文化遺産の成り立ちと、その中でも世界遺産登録されているもの、特に Saeed 氏が調査に携わられたタキシラ *Taxila* 遺跡群、Ahmed 氏が保存に携わられているラホール *Rahor* 城を中心に紹介された。パキ



スタンは 200 万年前の旧石器時代の遺跡・遺物が最も古く、それ以降、石器時代から仏教時代、イスラム時代までと非常にバラエティにとんだ文化遺産が存在するという。文化遺産の調査・保存等は、1947 年以前までは、イギリスが行っていたが、それ以降はパキスタン政府が調査・保存に取り組んでおり、パキスタン考古局は主に有形文化財の保存・修復を中心に、遺跡の発掘調査や分布調査を行っているそうである。



Ahmed 氏は主にパキスタンにおける遺跡保存のプランおよび基本方針を紹介された。現在パキスタンの文化遺産は人為的要因、自然的要因からなる様々な危機に瀕しているものが多く、それらの遺跡を保存・修復するために、まず「マスタープラン」を作ることからはじめる。マスタープランはただ単に将来的な計画というだけではなく、短期的なプランと長期的なプランに分けて考えることが通常であり、短期的な面では、壊れやすい建造物の修復方法や、意識の向上、長期的な面では能力開発を重視している。また、外国の国際的機関からの文化遺産保存のガイドラインを採用しており、パキスタンの文化財保護の規則の変更も行っているそうである。また文化遺産の保存と同じように工人・職人たちの技術の保存ということに関しても同様に重要視している。パキスタンはイスラム社会としては珍しく女性の社会進出がみられ、文化遺産保存・修復作業にも参加している人もいるそうである。

1.2 遺跡保存を通して見た国際協力のあり方—ガンダーラ遺跡保存プロジェクトから—

増井正哉 (奈良女子大学生生活環境学部教授)

増井先生は 1983 年からパキスタンの文化遺産の調査・保存を行われている。本企画では特に増井先生がプロジェクトの代表を務めたガンダーラ遺跡の調査・保存活動の具体的な内容および、そこから増井先生が考える「海外における文化遺産保存の意義」についてご講演いただいた。

パキスタンはインドの西北に存在し、中央アジアからインドに入る玄関口であり、インドの文明、文化を外に発信する出口であったといえ、ガンダーラ遺跡はその様子を色濃く残す遺跡であった。

遺跡が調査・保存される対象となるのは、破壊されるからである。遺跡が破壊される要因として自然的要因、人工的要因が挙げられるが、特に急速的に遺跡の破壊が進む要因であるのが、人工的要因である。人工的要因として大きいのが、盗掘、不用意な発掘調査、そして地域開発である。かつては盗掘が破壊要因の最たるものであったが、近年では、パキスタンの急速な経済開発の影響もあり、地域開発による遺跡の破壊が多い。これは現地の住民にとっては、遺跡を保存するよりも、破壊し開拓を行うことによる利益が大きいことに起因する。

そのような破壊を受けた遺跡を保存・修復するために、1993 年からユネスコと日本政府の信託基金によるガンダーラ遺跡保存プロジェクトが始まった。この信託基金による文化遺産の保存プロジェクトはパキスタンだけでなく、世界各地で行われており、実質的に日本の専門家が海外の文化遺産の保存・修復に協力する枠組みを作ったプロジェクトであり、意義深いものであったといえる。プロジェクトの 1st Phase では遺跡の分布調査とその記録、技術交流、ラニガト遺跡におけるモデルプロジェクトの確立のという 3 つの活動を主に行った。なお、この時プロジェクトでは余計になるような新しい試みは行わず、当時の現状の中で持続可能な活動を行うということ、つまり将来的にパキスタンが独自に保存活動を展開していくためのステップとなることを基本方針とした。具体的には、継続可能なシステムや工法の開発、地域の環境にあった新しい保存技術の開発、必要最小限の施設整備である。1st Phase の成果として分布調査において遺跡の現状を把握するとともに破壊のメカニズムを明確化したこと、国際ワークショップにおけるラニガト遺跡保存の技術的方向性を検証・確認、そして実際に在地技術・材料と導入技術の融合による保存技術(キャッピング)を開発したこと、保存修復技術者のスキルアップ、またラニガト遺跡の保存整備の一環として人々が訪れることができるように周辺の道の整備を行ったこと等がある。それにより、近辺の小学校からの見学やキャンピングサイトの対象となったことが主な成果であり、その結果、日本・パキスタンの両政府とユネスコの 3 者協議により評価され、ラニガト遺跡は世界文化遺産に推薦され、既登録遺跡の拡張としてフォローアップ・フェイズの開始が決定された。こうして 2000 年から 2nd Phase が開始され、現在に至っている。

2nd Phase が始まった 2000 年ごろからパキスタンの経済状況が大きく変化し、パキスタンの



人々が観光開発に強い関心を持ち始め、パキスタン独自でも遺跡の修復が行われ始めた。しかし、それにより、ツアーリズムだけが先行し、遺跡自体の保存がおざなりになってしまうという場合も出てきた。その状況と 1st Phase の成果もふまえた上で 2nd Phase では遺跡保存修復のモデル的施工、遺跡保存の技術開発を行うこと、遺跡の観光地化と地域開発の可能性の検討が課題となった。現在までの成果として、遺跡保存の技術開発の面では、漆喰塑像の修復と遺跡での保存、敷石の修復と排水処理技術、石材の処理・接合技術、表土浸食への対策が行われている。現在までの成果の総評として、増井先生自身、技術開発は成功したとのことである。一方で、今後の課題として、世界遺産登録にむけての遺跡の重要性を訴えるためのプレゼンテーションの方法を考えていくこと、遺跡周辺のインフラを整えていくこと等が残っているとした。

増井先生は、文化遺産の保存は、非常に難しいことではあるが、プロジェクトを通して行ったことを現地の人々と共有していくこと、そして現地の人々の資源を生かしていく形にしていかなければならないということが重要であり、プロジェクトを進める中でどれだけ住民と文化遺産の価値を共有できるかが一番求められているということ、そして最後に自分たちが行ったことが、成功した事でも失敗したことでも、うまく次の世代が生かしていくことを期待しているとのことであった。

1.3 アンコール遺跡群の未知に迫る

上野邦一（奈良女子大学古代学術研究センター特任教授）

上野先生は 1990 年のラオスのワット・プー遺跡の調査以来、東南アジアの遺跡調査に携わられている。本企画では特にその中でも 1991 年から調査されたカンボジアのアンコール遺跡群について御講演いただいた。

カンボジアは、東南アジアのタイ・ベトナムに挟まれた国であり、民族はカンボジア人、クメール人で、言語はクメール語が主要で話されている。日本では特にアンコール遺跡群が有名であるが、コーケー遺跡やサンボレイ・プレイ・クック遺跡などカンボジア全土に遺跡が存在する。カンボジアはかつてポルポトによる知識人の大量虐殺が行われ、研究者の数がまだまだ少ないのが現状である。



アンコール遺跡といえば、真っ先に思い出すのがアンコール・ワットであるが、遺跡群の中には大きな寺院だけでも 30、小さい寺院も合わせると数百の遺跡数になるという。現在寺院の大半は遺跡となってしまうが、中には現在でも利用されている寺院も存在し、地域住民と密接な関わりをもっているといえる。しかし、そのような状況でもアンコール遺跡群はまだ分かっていないことの方が圧倒的

に多いという。アンコール遺跡群の寺院は石積みで作られており、縦からかかる力には強いが、横からの力には弱く、一つの石が崩れると次々と崩れてしまうという構造になっており、実際に崩落してしまっているものや、木が遺跡を取りこんでしまい、逆に気を切ると遺跡が崩壊してしまうという問題を抱えた遺跡も存在する。上野先生はアンコール遺跡群のなかのバンテアイ・クデイという寺院の調査を行った。この寺院は少し傾いており、修復する必要があったが、一番の問題は寺院が建っている地盤に欠陥があり傾いていると考えられ、そのことから寺院の下を調査する必要があった。その発掘調査により、寺院のかつての建物のプランが判明し、また、仏像が274体発見されたことが特に大きな成果であった。現在仏像は博物館にすべて移され保管されている状態で、これは一見当たり前のようなことであるが、やはり地元の人々にとってはカンボジア人が実際に調査をして保存するということが大変意味があったため、他国が出土品を持ち去ることをしないということを証明した点で非常に重要であったと語られた。

上野先生はバンテアイ・クデイ遺跡の調査のほかにプノンペン芸術大学での講義を行っている。先生は将来的にはカンボジア人自身が責任を持って文化遺産を修理・保存していくべきだと考えられている。しかし、近年カンボジアでは観光業が発展してきており、調査に参加したカンボジアの学生たちが文化遺産の保存に携わる仕事ではなく、観光業の仕事に就くこともあり、それが残念だと語られた。

1.4 質疑応答

いくつか質問が出たが、紙面の都合上ここでは本企画のテーマに沿ったものについてのみ紹介する。

- 「現在進行中のプロジェクトで外国人がやってきたり、全く異質な人が行っていることに對して地元住民はどのように感じているか」（上野先生に対して）
→現在カンボジアの遺跡保存活動において、カンボジア自身が資金を出している遺跡はなく、まだ保存の面で自立できていないということが現状であるが、保存に携わるカンボジアの人は将来的には、自分達の手で行いたいという意志はもっている。ただ知識のない地元住民にとっては、アンコール遺跡群は文化遺産ではなく、信仰する寺院という意識が強い。そのため、研究者だけでなく、住民がきちんと文化遺産の保存を理解していかなければならず、現在はその途中である。
- 「遺跡保存が完成した後の観光事業の効果はあるのか」（上野先生に対して）
→アンコール遺跡群の近くにあるシュムレップという町を紹介。町全体が観光で成り立っており、これは、遺跡が調査・保存により状況が良くなっただけでなく、町にホテルや飲食店が充実したこと等にも起因している。しかし、逆に観光客が増えたことにより遺跡の保存状態が危ぶまれる問題も出てきている。

2. パネルディスカッション

パネルディスカッションでは増井・上野両先生に「今後の文化遺産保存の課題について」というテーマで討論していただいた。現在パキスタンやカンボジアだけでなく、アジア全体に文化遺産を活用するという傾向がみられる。しかしその中で文化遺産の観光への利用という点と保存という点の間で葛藤があり、研究者、政府、民間のレベルごとに文化遺産に対する認識の違いが大きな問題であるといえる。例えば、研究者は残っている遺跡の状況をほぼそのままに最低限の修復をして保存しようという考えが強いが、観光に利用しようとする人は、建物などを復元してしまう方が人が来ると考える。どちらが良いかははっきりと言えないが、その問題を今後どのように解決していくかについては、社会全体の文化遺産への認識や意識そのものを変えていかなければならない、ということであった。現在日本では、文化遺産への関心が高く、保存という認識も強いが、数十年前までは日本も現在ほど文化遺産保存の認識はなかったといえる。アジア諸国はかつての日本と似たような状況にあり、今後、教育や現地での説明会を行うことにより、文化遺産保存の認識を高めていくことができるのではないだろうか。文化遺産の保存に関しては、国内外問わず、研究者だけのレベルで考えていくのではなく、やはり現地の住民と密着した形で「保存」というものの方向を探っていく必要があるということに至った。



3. 総括

今回「海外における文化遺産保存の意義とその成果」というテーマで、実際に海外での発掘経験のある上野・増井両先生、そして現地の研究者である Ahmed、Saeed 両氏にご講演いただいた。企画者一同、文化遺産には非常に強い関心を持っており、今回の講演は非常に興味深いものであった。本企画の目的である「海外における文化遺産の保存や修復、調査の現状とその成果を学ぶ」ということに関してご講演いただいた先生方の協力により、その目的を十分に達成できたといえる。我々企画者一同が、今後このような企画を立ち上げる機会はないであろうが、今回の企画によって、参加者の皆さまが何かを感じ取ってくだされば、幸いである。

企画当日までの準備は多少の問題があったが、支援教員の出田先生や他の皆さまのご協力により、ほぼ滞りなく進めることができた。しかし、広報に関しては、1週間ほど前からしか行えず、講義を聞きに来た参加者の大半は企画者からの口コミにより本企画を知った人が多く、チラシ等により本企画を知った参加者は少数であった。参加者アンケートの結果でも、広報をもう少しす

るべきであったという意見が寄せられており、それについては反省すべき点がある。

最後になったが、本企画において講演することを快諾して下さった講演者の先生方、お忙しい中参加して下さった支援教授の出田先生、そしてご協力していただいた皆様に大変感謝を申し上げます。

(文責：濱田 晃子)

資料：アンケート結果

アンケート結果(回答数：15)

1. 本企画をどこで知りましたか？

- a.大学のHP：0 b.チラシ・ポスター：5 c.知人から聞いて：8
d.その他：2

2. 本日の講演会の中で最もおもしろかったもの1つを選んでください

- a.「アンコール遺跡群の未知に迫る」：6
b.「遺跡保存を通してみた国際協力のあり方—ガンダーラ遺跡保存プロジェクトから—」：4
c.「パキスタンにおける文化遺産調査について」：1
d.パネルディスカッション：4

3. 本企画について何かご感想がありましたらご自由にお書きください

- ・パキスタンの人の発表をもっとききたかったです。
- ・広報が少なかったと思います。
- ・全て面白かったです。パキスタンに関して全く知識がなかったのでただただ驚くばかりでした。アンコール遺跡は行ったことはあっても発掘に関してはわからなかったもので、興味深かったです。住民運動や観光に関心があり、パキスタンやアンコールで共通の問題に思いました。
- ・遺跡についての知識は全くなかったのですが、わかりやすく面白かったです。アンコール遺跡は、科学が発達した現代でもわからないことが多いと知り、驚きました。
- ・ガンダーラ遺跡、カンボジアのアンコール・ワット周辺について遺跡の保存と文化遺産・遺跡に対する地域の人々の意識の点から興味深く聴かせていただきました。新しい知識を得ると同時に色々と考えさせていただきました。